



歳時 世相篇

25

聖週間とは

キリスト教におけるもっとも重要な祭礼のひとつとして、イエス・キリストの復活を祝う復活祭(イースター)がある。その復活祭直前の一週間を聖週間とよび、キリスト教圏では新約聖書の福音書にしろされたイエス・キリストのエルサレム入城から最期の晩餐を経て、磔刑、そして三日目の復活までを再現する祭りが執りおこなわれる。また聖週間を準備すべく、復活祭前の四〇日間(四旬節)は、伝統的に食事の節制と祝宴が自粛される。それだけに、蓄積されたエネルギーは、聖週間や復活祭のときに爆発し、華麗な祭礼が催されるのである。復活祭は、春分の後の最初の満月が出現する日の次の日曜日とされているため、年によって日付が変わる。ちなみに二〇

セマーナ・サンタ 聖週間だ、盗掘へ行こう!



南米ペルーでは、スペインによる征服以来、人びとの暮らしのなかにキリスト教が浸透し、聖週間などの祝祭も華麗におこなわれるようになった。しかし、他のキリスト教国ではみかけられない、ペルーならではの光景が存在する。遺跡の盗掘である。聖なる日に、何故人びとは自分たちの祖先が築いた栄光の証であるはずの遺跡に盗みにはいるのか。そこにはキリスト教の布教過程が大きな影を落としている

盗掘なら聖週間

しかし、ペルーでは華麗な祭礼と同時に、セマーナ・サンタならではの習慣がある。盗掘である。セマーナ・サンタの一週間のなかでも、特にイエス・キリストの受難の日にあたる金曜日(ビエルネス・サント)に、人びとは近所の遺跡に出かけていき、スコップを使ってせっせとお

か、身につけるといふ。災禍から免れる、幸運をもたらすと信じられているからである。

現在では盗掘は違法だとわかっている人が大半なので、インタビュにも苦労した。わたしの最大の関心は、セマーナ・サンタになぜ盗掘をおこなうのか、という点にあった。

これには、キリストの死に際し、遺跡など霊的存在が宿る場所の口が開くなどして埋もれた宝が取りやすい状況になるからだという答えが返ってきた。とくに北海岸では、遺跡に宿る霊は邪悪な存在として、人びとに不幸や病気をもたらすと信じられており、近づくことさえいやがる人もいる。霊力が弱くなれば、盗掘もしやすくなると考えるのは当然である。

キリスト教の布教が盗掘を呼び起こした

ここに見られる自分たちの祖先が築いた栄光の文明の証であるはずの遺跡に対する否定的なイメージは、キリスト教の布教過程で、征服前の宗教や宗教施設を異教のシンボルとして徹底的に弾圧していったことから生じたものである。征服後、四六〇年も経てば、善なるイエス・キリストと邪悪な遺跡の霊という対立が受け入れられたとしてもおかしくない。だから否定的な意味が付与さ

関雄二

民博 研究戦略センター

一九七九年以来、南米ペルー北高地において神殿の発掘調査をおこない、アンデス文明の成立と変容の解明に取り組む。また、文化遺産をめぐる社会問題にも取り組み、遺跡博物館を核とする村落調査を進める。昨夏、現地の大学と共同で調査を進めるパコバンバという神殿遺跡で黄金製器を副葬した墓を見つけ、アンデスの卑弥呼として日本で報道された。

宝を探すのである。ペルーは、古代アンデス文明の成立した場所であるから、遺跡ならばいくらかもある。

今から一八年ほど前、実際に聖週間の金曜日に盗掘の実態調査をペルー北海岸で実施したことがある。アンデス文明と聞けばインカ帝国やマチュ・ピチュの石造神殿が思い起こされるが、ペルーの海岸地帯では、沖合を流れる寒流の影響で雨が降らないため、砂漠が広がり、そこに、焼いていない日干しレンガを積み上げたピラミッド型神殿や都市が築かれた。こうした遺跡に眠る金製品や土器などをねらって盗掘者が押し寄せるため、地平線の彼方まで盗掘の穴が連続しているところも少なくない。

調査を実施したペルー北海岸の一県だけでも、文化庁地方支局と警察との合同取り締まりにより、八〇名の盗掘者が逮捕された。あくまで氷山の一角である。一般に盗掘によって何かを見つけると、家に保管する

れた対象を壊したとしても罪悪感はないのである。

もちろん盗掘はセマーナ・サンタに限らない。遺跡の霊さえ押さえれば、遺跡に近づくことはできるからだ。一時的な現金収入を企む盗掘者のなかには、遺跡の霊を操ることができる呪術者に邪悪な霊から身を守る儀礼を依頼する者もいる。また見つけたお宝のうち、呪術師には呪具となるようなものを渡すという。盗掘者と呪術師とのあいだに成立する見事な補完関係である。

ここまですると、遺跡の保護が難しいことに気づくであろう。キリスト教暦と結びついた盗掘にせよ、商業的性格の強い盗掘にせよ、公共の宝の破壊として糾弾するペルーの文化財関係者の主張は、同じような文化財を調査してきたわたしとして十分に理解できるし、共感もする。しかしこうしたことばに空しさを感じてしまうのも事実である。なぜなら文化財や文化遺産という概念やその保護政策は、近代西洋社会の産みだした産物であり、その当の近代西洋を支え、密接に関係してきたキリスト教が、植民地ペルーに浸透し、土着の信仰を変貌させ、やがて皮肉なことに盗掘などの遺跡破壊に従事する人びとの精神世界を支える原理を作り上げることに加担していったのだから。